

北海道大野記念病院

齋藤孝次理事長

大野猛三院長

西区西野で30年近く、心臓疾患の治療で道内をリードしてきた心臓血管センター北海道大野病院は、宮の沢に移転新築し、2016年10月15日に北海道大野記念病院(276床)としてオープンした。21診療科を標榜し、国内屈指の最新医療機器をそろえた総合病院の機能を有し、新たなスタートを切った。齋藤孝次理事長と、大野猛三院長に話を聞いた。

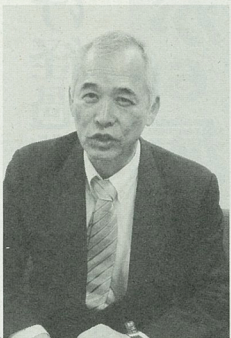
《齋藤理事長》

— 移転新築によって病院がどのように変わったのか

がん、脳卒中、心臓病の3大疾患と運動器疾患を中心とした高度急性期医療とこれらの疾患に対する予防医療の展開が北

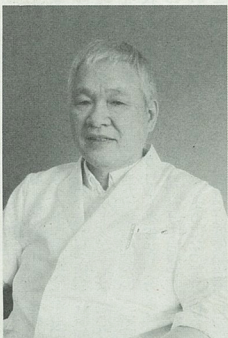
北海道の医療を興す

インタビュー



齋藤孝次理事長 1948年1月15日生まれ。札幌市出身。札幌医科大学医学部卒業。札幌市立大で臨床研修。札幌市立大で臨床研修。札幌市立大で臨床研修。札幌市立大で臨床研修。

社会医療法人 新病院 地域貢献と次世代つなぐ医療へ



大野猛三院長 1975年卒。札幌医科大学卒業。札幌医科大学で臨床研修。札幌医科大学で臨床研修。札幌医科大学で臨床研修。

北海道大野記念病院の目標は専用のマンモPETも手術支援システム(ダウを設けることで、人材確保に貢献する)を導入し、がんの診断に力を入れたい。インテリジェントも整備し、保につなげていきたい。ただし、地方に比べて、さまざまな人が集まる。とはいっても競争は激しく、その中で、最新設備の装置を用意した。放射線治療は道内初の一ツの武器になると期待している。国内屈指の高度機器を使える環境を整えることで、全国から優秀な人材を集めていければと考えている。

(1面インタビュー続き)

《大野院長》

—新病院はいつから構想していたのか

これまで心臓疾患のさまざまな治療で、道内外から認められてきた心臓血管センター北海道大野病院だが、当初は循環器だけでなく、消化器、呼吸器も備えた成人病の病院を目指していた。

しかしベッド数の問題などもあり、循環器主体の病院となった。そうした中で、社会医療法人孝仁会が抱えるスタッフ確保問題、札幌市内での総合的な病院開設と、当院の思惑が重なり、移転新築が実現した。国内初

の病院では、さまざまな最新設備を整えた。近年は医師の技量だけでは難しい治療も多く、それを手術支援ロボットに代

わって、社会医療法人孝仁会が抱えるスタッフ確保問題、札幌市内での総合的な病院開設と、当院の思惑が重なり、移転新築が実現した。国内初

—今後への期待は

心臓疾患患者の高齢化が進み、合併症も抱えて

心臓疾患患者の高齢化が進み、合併症も抱えて

ず、あらゆる診療科で低侵襲化を図り、入院期間を短縮できれば、身体的、経済的にも患者の負担軽減につながる。

新病院では低侵襲治療を、一つのテーマとして

新病院では低侵襲治療を、一つのテーマとして

り、日々充実している。入院患者も増えており、今後この流れを継続していくことが重要だ。

年齢的にも、病院を開業するのはとてもエネルギーがある。本来はもっと若い世代に委ねたかったが、今の医療情勢では容易なことではない。後進に胸を張って残せる病院に育てていきたい。

年齢的にも、病院を開業するのはとてもエネルギーがある。本来はもっと若い世代に委ねたかったが、今の医療情勢では容易なことではない。後進に胸を張って残せる病院に育てていきたい。